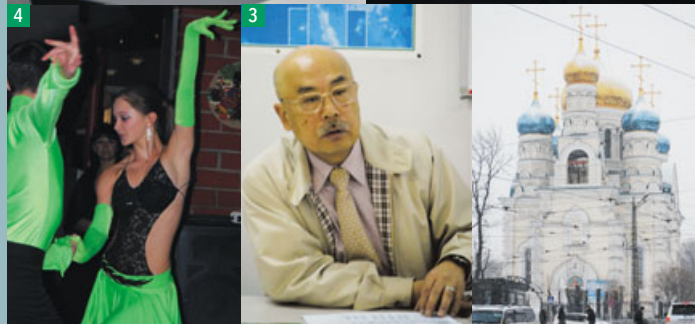


厳冬期のウラジオストックだから見える可能性 ロシア沿海州での Made by Japaneseを 検討する視察ツアー

農業経営者読者の会は去る2月1日～5日、ロシア沿海州・ウラジオストックに視察ツアーを行なった(事務局含む総勢11名)。ソ連からロシア、共産主義から資本主義へと国家体制が移行する中で、変化を遂げつつあるウラジオストック。この地で展開する日本農業の可能性を見出せる行程となった。

大
広
い
な
る
魅
力
を
感
じ
た
、
地
理
条
件



1日中の気温はマイナス6℃前後。ツアー2日目こそ雪に見舞われたが、それ以外の日は穏やかな陽光が差していた。青空と影の濃さから、その様子が伝わるだろう。2ツアー最終日、市内にある日本国総領事館を訪問。長谷川首席領事と面会し、ウラジオストックでビジネスを展開するにあたっての側面的支援を陳情する。3ツアーのコーディネーターであるウラジオストック日本センター・山本博志所長。文化交流のほか、日口のビジネスマッチングに携わっている。4レストランでのひとこま。ウラジオストックは美女の宝庫である。

2月1日午後1時。新潟空港に集合した参加メンバーは11名。正式な呼びかけ以前から参加を希望していた農業経営者が、今回の日程が地元農家の集まりと重なってしまい、参加できなくなる人が続出。申し訳ないことをした。それでも、ウクライナでの大豆作にも取り組む青森の木村慎一氏を含め3名の農業経営者、コメコンサルタント、温室用フィルム販売会社、農業資材販売会社、その他農業とは関係の無い異業種の方を含めての視察団となった。

沿海州農業局、野菜試験場、イチゴ観光農園の受け入れを表明してくれている植物園や水田の提供を申し出ているマーティン・テート氏など、同地でのビジネスパートナーになっていただけそうな方々とも情報交換ができた。沿海州でのMade by Japaneseは現実的な一歩を踏み出したことになる。

ウラジオストック日本センター所長の山本博志氏に全行程で同行していただいただけでなく、テート氏も我々の訪問にあわせて帰国していたニュージールランドから現地に戻って農地を案内してくれた。

今回のツアーの報告と同地でのMade by Japaneseに関しては、3月2日の全国大会および本誌次号より2回にわたり報告する(昆吉則)。



沿海州野菜栽培研究所を視察5同所はもともとは国立の研究機関だったが、民間の一企業で年商は7億円程度。農産物の販売のほか種苗開発などを行なっている678次いで見学したのは温室。ハウスの造作からすると、30年以上前のものかと思われる。天井からは水滴が落ち、燃料コストも売上の4割を占めるといふ具合9天敵農法の研究に力を注いでいる。

娯楽が少ないロシアに 観光農園ビジネスを！

気温が低くても、日照があることから、エンタテインメント要素を含んだ、イチゴの摘み取り観光農園を展開するというのが今回のツアーの目的のひとつ。既存施設の見学およびビジネスパートナーを探した。



3日目に訪れたウラジオストック植物園。こちらは民間ではなく、モスクワ科学アカデミーの下部に位置するので官営。ただし、補助金だけでなく自前でビジネスを手がけて収入を増やしたいという意向がある10敷地内のハウスの一部は野ざらし状態になっていた。「新たに立て直す」のではなく、「修繕する」という建前があれば、国の決裁も不要でできるという12別のハウス内では夏イチゴが栽培されていた。

13



13ウラジオストック市内から車で3時間ほどあるホロリ地区。地平線が見えるほどの広さの手つかずの休耕地がある。写真に収めたのは、中国系企業が所有する農地。まだ生産は行なわれていない。農業機械ではなく人海戦術を使って圃場整備をするという。

世界市場を席捲する 日本品種米の 生産拠点に！

もうひとつの目的は、日本品種米をウラジオストックで大規模に生産し、安価で高品質なコメを世界各地に輸出するものである。すでに中国・韓国の企業は、数千haの農地を獲得し、ロシア国内に流通させている。



16



15



14



14中国系企業の販売するコメ。ロシア国内ではすでに流通している。30kgで1,000ルーブル(2,600円程度)。食べ方はロールキャベツに入れるなど、食感を楽しむ素材として使われている。15倉庫には無造作に玄米が置かれる。16正月だったため、ほとんどの中国人は帰省して不在。17沿海州農業局を訪問し、副局長からウラジオストックの農業の現状をヒアリング。18ホロリ地区の農業経営者、マーティン・テイト氏(右から2人目)。同氏は編集長インタビューにも登場。

18



17

